７月定例教育委員会　資料	
年月日	平成２９年7月２５日
担当課	教育委員会文化財課

報告事項(2)

鳥取市の新登録の登録有形文化財(建造物)について

国に登録有形文化財（建造物）として登録が申請されていた下記の建造物について、平成２９年７月２１日に開催された国の文化審議会(文部科学大臣の諮問機関、会長馬渕明子(まぶちあきこ))において、国登録有形文化財（建造物）として登録文化財原簿への登録が答申されましたので報告します。

記

【今回答申される文化財】

〇山王日吉神社本殿　鳥取市布勢

〇田中家住宅主屋　　鳥取市鹿野町鹿野

今回登録が答申された文化財

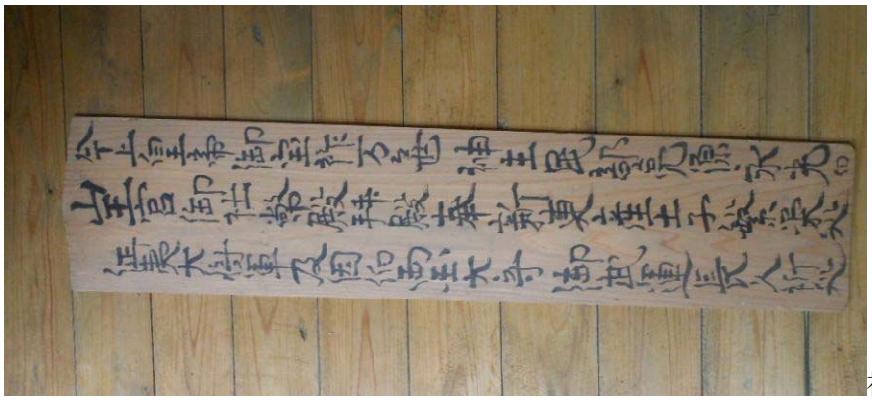
文化財名　　：山王日吉神社本殿
登録基準　　：１　国土の歴史的景観に寄与しているもの
所在地　　：鳥取市布勢
建築年代　　：嘉永３年（1850）建築/昭和５５年改修
特徴等　　：

山王日吉(ひえ)神社は貞治三年（1364）因幡の守護となった山名時氏から数え６代目の山名勝豊が文正元年（1466）布施（現布勢）の天神山に城を構え守護所とし、永正 10 年（1513 年）頃、湖山池に面した卯山(うやま)に山王宮が天神山城の鎮護神として、比叡山山麓の坂本（大津市）『日吉大社』の分霊を勧請し奉祇したのが始まりとされる。天正 8 年（1580）には羽柴秀吉の鳥取城攻めの折り当神社も兵災にかかり全てが焼失したが、亀井茲矩による再建を経て、江戸時代には、山王社は徳川氏の拠る江戸の山王日枝(ひえ)神社（家康が日吉大社より勧請した山王権現で徳川氏の氏神とした）に直結、布施の「日吉(ひえ)さん」と呼びならわされた。代々の藩主は、元服までの若殿、姫君を氏子と定めて折々の社参を怠らず、藩の祈祷所として時の参勤交代の儀式も行っている。神輿をはじめ祭具一切に至るまでが藩の造営によって行われていて尊崇されていた事が伺える。

現在の日吉神社本殿は棟名札によると嘉永３年（1850）第 12 代池田慶徳が弊殿、拝殿と共に建替えご奉祇したものである。棟梁は木原傳兵衛と記されている。木造平屋で総欅造り、屋根は切妻銅板一文字葺き（創建当初は柿葺きで以来何度か葺き替えが行われている）で、流れ（一間社）形式の平入りだが、平面は内陣と外陣の二間取りである。柱は太めの丸柱（260φ）、外壁は板の落し込み、正面開口部は 4 枚引き違い戸、両妻面の開口部は横桟の引き違い板戸が嵌め込まれている。向拝の蛙股には丸に揚羽蝶（池田家家紋）を掲げ社紋となっている。又正面 4 枚引違い戸の左右には社紋と徳川家家紋が並んで掲げられている。また内陣の入口の 4 枚戸にも並びは左右逆であるが同様に紋が掲げられている。昭和 29 年(1947)の山王社創祇 600 年祭の時弊殿、拝殿の建替えが、そして拝殿及び向拝の一部が旧社務所の前に移設され蛙股の三つ葉葵の御紋も見られる。その後昭和 55 年（1980）に屋根部分の銅板葺き替え、同時に弊殿及び拝殿の建具などの改修が行われ浜縁を除去し台廊が設けられている。（棟札）

山王日吉神社本殿　全景

向拝上部蛙股社紋


社殿棟札（表面）

文化財名　　：田中家住宅主屋
登録基準　　：２　造形の規範となっているもの
所在地　　：鳥取市鹿野
建築年代　　：江戸末期建築/昭和１８年頃改修
特徴等　　：

田中家住宅は鳥取県東部の鳥取市鹿野町鹿野のほぼ中央に位置する。鷲峰山系の鹿野城があった妙見山（俗にお城山）の北側の山裾にあたる。

田中家住宅は文久年間（1861~1863）の建設と言い伝えがあるが、棟札等は見つかっていない。その建築に際し西側奥に設計していた部屋はその北側に居住していた、飛脚のクレームで取りやめたと伝わっている。北側奥の西側 に部屋が作られなかったのはそのためだと思われる。

木造切妻造り、2 階建て桟瓦葺きの南北棟の平入り形式の建物である。建物間口は４間半で、細長い１列３間形式でその奥に浴室、便所等が平屋であり、主屋の北側に２階への階段が設置されている。昭和 18 年(1943)の鳥取大震災で主屋北側に亀裂が入り、手直ししたが十分に戻らず、差鴨居と柱を鎹で補強している。その際１階北側の「中の間」を６畳から８畳に、玄関入って右側の「ミセ」の１０畳を半間ずらして８畳に改修して、現在の間取りとなっている。その際「中の間」の北側にあった仏壇を「奥の間」に移して、採光、通風のために掃き出し窓を設置している。2 階は北側に「タカノ間」「ヒクノ間」があり天井が低く、そのためにそう呼ばれ、昭和 40 年頃に畳をとってフローリングのの床張りにして天井高を少し高くした。南側は道路側が物置、クドがあった場所の 2 階もその時一緒に工事をして床を張り納戸を設けた、西側の階段を上がった所は８畳の寝室であった。

ファサードは二階の低い棟高の形状を残し、京風の千本出格子が道路側正面につき、屋根は越し屋根の付いた和小屋組で大梁、敷梁、小屋束には平刃の手斧で斜めに細かく削った仕上げの痕跡が残っている。建替えしないと取り替えられない大梁等に手斧の痕跡があり軒高の低い、江戸末期の住宅の形状である。また、正面の軒を支える腕木の持ち送りは海老虹梁のように曲げが深く、先端の拳鼻に近い彫刻を施し、側面に雲の文様を彫っている。詳しい年代は特定できないが浅川滋男らの倉吉町家の腕木意匠の変遷史研究からも考え、江戸末期まで遡って考えることは十分可能である。
また、昭和 40 年頃、台所改修で土間だったクドを取壊した。その上部の天井裏の壁、梁、小屋組等未だに厚い煤が付着しているが、その風合いはかなりの年月を感じさせる。先に登録文化財となった熊谷家等の数棟の住宅とともに、鹿野地域の歴史的意匠の規範となっている。

田中家住宅主屋
正面と北側の妻
側面

千本出格子の
嵌った平入り
正面